

第五章 もうアレクサンダー大王はいない

「健康なら長生したい。だからピンピンコロリに憧れるのね」

イリがノロに話しかける。

「でも戦争が起これば苦痛の中で死ぬことになる」

「痛いと思う間もなく殺されるかもしれないわ」

「そうじゃない。戦場ではそんな死も多いだろうが、そうでない方が多いと思う。兵士だけじゃない。家族もつらい苦痛を味わうことになるんだ」

「戦争を仕掛ける政治家は何も感じないのかしら」

「戦争するとき偉いさんはずーとずーと後ろに隠れて兵士を将棋の駒のように使うだけ。痛みなんかあるわけない」

「そうね。大統領が国旗を振って銃を撃ちながら敵に向かうことはないわ」

「昔はそうでもなかった。昔の偉いさんは本当に偉かったのだ。アレクサンダー大王なんか先頭を切って敵の陣地に突撃した」

「戦争せずに偉いさんだけのオリンピックを開いて競争させればいい」

「すぐ倒れるさ」

「そのまま眠ってくれたらいいのに」

イリの言葉が過激になってくる。

「権力者。人生を知り尽くした割には超利己主義者。しかも頑固。若者を洗脳して戦争に駆り立てる」

「老害？」

「権力闘争に打ち勝った老人はパワフル。歳をとれば普通は角が取れて温和になって悟りを開くはず。でも権力を握った者は悟らない」

「なぜ」

「いつまでも若いと思っているんだ。朝、歯を磨くときまともに鏡を見ていない」

「それは老眼だからよ」

ノロが手を打って急に興奮する。

「そうだったのか！ 近すぎて見えないのだ！」

超近眼のノロにとって新しい発見だった。

「何を感じしているの」

「イリの言葉！ 人類始まって以来の重要な格言。一生忘れない」

イリは天井を見上げて呆れかえる。

「灯台下暗し」

「若者が道具として使われる。年寄り権力者が若者をもてあそぶなんて大問題だわ」

浮遊透過スクリーンにモノクロ映像が現れる。プロペラ戦闘機に乗った若い特攻隊員が敵の軍艦に体当たりしようとするが集中砲火を浴びて粉々になる。

「余命が短い老人権力者が特攻隊員になるべきだわ。将来国を背負う若者を犠牲にするなんて馬鹿げている。そんなことを続ければ戦争に勝つても国の未来はないじゃないの」

イリがスクリーンからノロに視線を向ける。

「自滅するだけの作戦。なぜ権力者はこんな事を考えるんだ？ 分からんなあ」

「だから権力者に『退化している』と自覚させなければならぬのよね。よく分かったわ」

ノロが小さな目を丸くする。

「すごい。超光悟り！」

「誰にでも分かる単純な話だわ。『後進に道を譲る』とか、『老兵は去れ』とかって言うじゃないの。権力者は尊敬される人格者になってほしいわ。もし尊敬を強要するのならまさしく老害だわ」

「遠くも見えてないのか」

「老眼じゃなく老害。権力を持った老人なんか早く死ね！」

ノロはイリの勢いに黙ってしまふ。

「老人はボケるもの。でも変なボケ方をして権力に固執すると困るから、なんとか清く正しくボケて静かな余生を送るようにしてもらわなければ」

イリが部屋から出ようとする。

「ど、どこへ行くんだ？」

「もちろん地球よ。プチレンコンに引退勧告するの」

「そうか。いよいよ独裁者同士の戦い、横綱同士の優勝決定戦か」

この言葉がイリに火をつけた。

「私が独裁者だって！」

「いや、横綱……」

「お黙り！」

ノロは急いで机の下に隠れようとする。しかし、のろまなノロは背後からのタックルで転けてしまう。

「一緒に行くのよ！」

「いやだ！」

ノロが丸い体型を生かしてラグビーボールのような不規則に転げ回る。

「もう！」

ノロはソシアのプチレンコン大統領より恐ろしいイリから逃れることができたようだ。

「両軍は広い平原で戦っています」

ノロが行方不明になったので仕方なくイリは海戦が得意の榊と空戦に強い加藤を連れてノロが建造した宇宙戦艦で地球に向かおうとする。

榊は元潜水艦の艦長で船を操らせると天才的な能力を発揮する。今や宇宙戦艦隊旗艦の艦長を務める。加藤は関東電力福島原子力発電所の所長だったが、教奇の運命的出会いを経てノロと出会い宇宙戦闘機隊ハヤブサを操る編隊長になった。

ウクライナー軍とロシア軍は戦車を主力とする歩兵隊で戦いを展開している。榊も加藤も陸戦の経験がないから気が乗らない。

「これを見なさい。こんな卑劣なことをするロシアの独裁者に鉄槌を下さなければなりません」
「確かにそうですが、これは地球人が解決すべき問題で介入は控えるべきでは？」

「お黙り！」

イリの口が真横に開く。そしてニーツと笑う。榊も加藤のその口を見てノロの口と勘違いする。

「喧嘩されると迷惑を受ける弱い立場の人がいっぱいいるのよ。今介入しなければ人類は猿に戻ってしまうのよ」

「猿？」

榊が驚く。

「私たち、自由に生きてきたわ。特にノロは。そのノロの予言よ」
加藤も榊もじっとイリを見つめる。やっとの事で榊が確認する。

「ノロが予言しているのか。それならノロが先頭に立つべきでは？」

「どこかに消えたの」

今度は加藤が疑問を投げかける。

「と言うことは介入に反対しているのでは？」

見抜かれたイリは一瞬言葉を失うが立て直す。

「でもここで食い止めて縄文人ぐらいまでの退化に押さえなければならぬわ」

「縄文人？」

「ノロの研究によると人類は縄文時代までは戦争をしていなかったようなの」

榊も加藤も驚くだけ。

「とにかく地球に向かいます。準備をしなさい」

「準備と言っても……どうすればいいのですか」

「任せます」

イリは独裁者モードに入った。地球の独裁者と戦うために。